

尾張・猿投山古窯跡群の基礎的研究(2)

東山古窯跡群の研究・予察

丸山 竜平

A Study on the Ruins of Sanageyama-koyo in Owari (Part2)

Ryuhei MARUYAMA

はじめに

本稿は、東山古窯跡群の新たな研究を開拓するための方法論を提示し、今後の研究に備えようとするものである。

なんとすれば、古窯跡や古窯跡群の研究は、どうしても編年的研究に終始しているきらいがあり、ついには編年のための編年に陥っているといつてさえ過言ではない。

このような指摘はいまに始まったことではないが、さりとしてその反省はついに省みられることなく、やはり同じ軌跡を後進の研究者がたどるケースはこれまで以上に多い。

たしかに、編年は重要であり、考古学研究には不可欠の基礎的作業である。そのことを疑うことは出来ないであろう。しかし、編年のための編年研究がより正しい編年を導き出すことは疑問である。そして、編年のための編年にはいくつかの重要な問題が編年上に残ると見たい。つまり、編年を目的とした編年は「欠陥をもった編年」であると考え。ではどうしてそのように言えるのであろうか。

1、古窯跡群研究の基本的な方針と姿勢

方法論の前提 - 第一点目 -

ここでいう古窯跡群は、須恵器生産のために築かれた窯跡をさすことは勿論であるが、本稿の主旨から言えば、このことが方法論上の第一の前提的要件となる。それは窯跡が須恵器の「生産地」であるとする特別の条件を持つことに由来する。

つまり、それは「消費地」に対比して、特に認識されなければならない遺跡の特質であると言いかえることが出来る。窯跡からの出土遺物は生活跡や消費地のそれとは資料の性格が全く異なることによる。

編年作業に際して、窯跡での層位関係が優先することは言うまでもないが、一括遺物はその同時的存在を、焼成といった行為を認識することによって主張し得るものである。このことは一括遺物の器種に関しては、その器種構成群の同時的存在が認め得るのである。ただそれはその窯跡に関してのみであり、他の窯跡ではまた別の焼成群が器種を構成していることになる。彼我の窯跡が同時期だからといって同じ器種を焼成にさいして共有していたとは言いがたいであろう。むしろ異なることが平常と見てよい。焼成群でみればなおさらである。このことは重

要であって、ここに窯跡と器種に関する関係が、消費地相互間ではまた異なった資料性をもち得ることになる。

消費遺跡では層位によって、一括遺物が一時期を共有する同時的存在であったことを証する。そして、それは「廃棄」段階のことである。消費地と生産地の遺物はそれぞれ、その段階の違いが微妙な時期的差異として存在しかねないのである。

もちろん消費地では長期的使用物が含まれることはあり得ることであるし、また逆に、その長期がこれまた短期的使用物にもなり得る性格のものである。

しかし、これにたいして、失敗品を廃棄した須恵器の生産地・窯跡では「原則として」上記のような事例はありえないことである。同時に焼成したものは失敗品であれば同時に廃棄されるのである。これをもって絶対的同時性を器種相互の中に認めうるのである。同様なことは消費地での廃棄された一括投棄物において同じく同時性が認めうるが、とはいえ、それは廃棄といった時点に関する具体相ではない。

古窯跡においては、その遺物が不良品として、また不良品なるが故に一括して廃棄されたものであったとしても、そこには他に多くの完成品があり、生活品として消費地に搬出されていたとの前提に立つのである。しかるに、廃棄物から現実の消費地における生活品の存在を想定可能とする。ならば、それらは消費地の器種間に時間的な同時性も容認できるといえよう。

方法論の前提 - 第二点目 -

さらに重要な第二点目は、古窯跡群は、「編年のためのよき資料」の源である以上に、実は窯跡に足跡を印した「須恵器生産工人達の生産の場」であったことである。

したがって、考古学的な、そして編年上の検討に入るまえに、まず、この工人達の歴史、また工人の技術とその系譜や維持、支配関係などを解明し、工人史を明かすことが使命であると考えべきであろう。では、工人の歴史を明らかにするとは一体どのようなことであろうか。

誤解を恐れず、イメージを持って簡潔に言えば、最初の工人は何処から来て、どこに最初の工房と窯を築いたのか、といった視点から工人史が始まる。

もちろん、工人達の集落や家族の構成、そして生業に携わったメンバーなども問題となる。そして、そのような初代に続いて、二代目は一代目とはどれほどの距離間隔をもって操業したのか。また、それは親子の関係なのか、あるいは縁者が後継したものか。さらには親子と縁者とが複数で系譜を引いたのか、といったことも検討されよう。

さらにその後、工人集団はいつまで、どこで、どのような歴史をたどり終息するのか、といった諸点を解明することが、先ず何よりも優先すべき課題と考える。

それはけして編年作業を目的としたものではなく、あくまでも工人史、あるいは集落跡、あるいは窯跡群史である。しかし、その結果が、さきの「編年のための研究」を克服する基となると考える。

2、古窯跡群研究の基本的な方法

古窯跡群系譜論

考古学の基本的な方法は通常「発掘調査」と明言される。しかし、むしろここではあえて「分布調査」を考古学の基本的な方法と指摘したい。たしかに、「発掘調査」は究極の検証方法ではあ

るが、「発掘は破壊である」との名言が示すように両刃の剣である。

とはいえ、その分布調査もまた今日ほど重視されず、かつその成果が生かされることの少ない研究態度もこれまでにないことである。そして、他方で「発掘調査」を万能とする考えが広く覆っている研究状況は悲観的といわざるを得ない。

なぜならば、古窯跡群の研究の基礎は、実はその他の考古学でも同じであるが、その古窯跡群の分布調査の成果以外に、優るものは無いといってよい。

必要なのは単なる分布調査ではなく、克明な悉皆調査である。そして表面採取やあるいは断面観察で得た遺構、遺物などの、遺跡の理解に関わる情報集積が研究の重要な前提になるといってよい。

このような自明のことが実践に供せられないその原因こそ、遺跡学からではない、遺物学からする編年が横行しているからである。つまり、ここでいう遺跡学とは、先に指摘した工人史であり、あるいは工人の家族史のことである。ひいては「古窯跡群歴代系譜論」であらねばならないとの考えに立つ。

少し具体化して言えば、古窯跡群をそれぞれの水系、ひいては谷筋ごとに、かつ年代を追って一世代ごとに確定していくことの基礎作業である。このことによって、歴代の古窯跡は、水系を遡る系譜もあれば、やがて谷から鞍部を経て新たな谷筋に窯業地域を拡大、もしくは開拓していく姿が読み取れよう。新たに陶土や薪を求めて山林を切り開いた結果と見てよからう。

そして、ときには複数の系譜が相前後しながら鞍部を超え地域を拡大したこともあった。同時的に操業窯が複数系列を生み出す時期が開窯以後間もなくこの山崎川水系最上流域に見とめられるのである。そこに古窯跡群の操業の画期が看取できる。

それは需要と供給の関係においても一層の拡大があった時代である。もちろん、この間での系譜関係相互において、焼成された器種や器形が問題となることは言うまでも無い。そして、そこでは単調な変化ではなく、編年の画期を示す変容を各器形と器型が示したことは言うまでも無い。

東山古窯跡群に関して言えば、その終焉期には、天白川とその支流である植田川を東に越えるといった歴史的な事件を経験することになる。この問題は次の課題であるが、そのような画期的な分布形態の変異時期において、どのような広がりを東山古窯跡群が持っていたのか、それが天白川左岸においての開始時にどのような規模と広がりにおいて、どのような分布形態を有していたかは重要な問題である。

さて、以上のように仮説的に系譜を追跡していけば、そこにはこの古窯跡群の「中心主体の系譜」の把握が可能となる。それのみか、さらには「支群系譜」の認定、それも単数ではなく、およそ複数の支群数が抽出可能となろう。そしてそれらのそれぞれが、どのように天白川にたどり着き、はたしてどの段階で天白川を東に渡ることが可能となったのか、が、天白川左岸域の分布形態の歴史的な分析とともに問われることとなる。

3、古窯跡群出土遺物認識論

古窯跡群の出土遺物を「編年のための編年の材料」としてはならないとの第一義的な根拠は、この遺跡が工人史の、もしくは窯業生産史の貴重な遺跡・遺物であることによるが、そのことは既に触れた。

もしこのような考えが認められるならば、現行での遺物の認識でこと足ることは無い。この

ことは遺物の実測図と整理方法に端的に示されるといってよい。

前者に関して言えば、つまり、工人史・窯業生産史の観点から言えば、土器生産における工人の技術の達成度とその品質維持といったことが問題となる。具体的に言えば、どこに技術的もしくは品質的な維持、改良がなされたのか、あるいは器形的な改変はどのような実態のもとにあったのか、といった課題である。しかも土器は破棄されたものであったがゆえに、何故破棄されたのか、どこに製品としての欠陥が生じたのか、が直に分かるところの、他の遺物と異なる稀有な資料である。この点を見逃す訳にはいかないであろう。

しかし、現実においては、そのような廃棄の原因を探るような実測図が提示されているわけではない。復元された完全な、いわば、商品化の可能な土器のごとく実測図に表現されているのである。問題の提示と解決には、廃棄された状態での器型を実測表現すべきである。

やや具体的に言えば、どこが歪んで廃棄されたのか、どこで他の土器と付着して毀損したのか。あるいはどこが高温を受けて亀裂が生じたのか、といったそれぞれの廃棄の原因が語られた実測図が要求されるのである。このこと的確な指摘によってのみ、どの系譜段階で、どの歪みが技術的に克服され問題が解消されたのか、といったことが初めて明かにできるのである。

なお、将来的に編年を考えていくには、上記の歪んだ実測図では使用に耐えないであろうから、その目的の為に、復元的な完成した図、つまり同器形の消費地出土の須恵器を参考にしつつ作図する必要がある。

さて、整理の問題はこれだけではない。他の一点は、器種構成群の問題であろう。つまり、任意に「お気に入り」の土器を実測図で明示するだけでなく、数値の上で全土器群の数を器種ごとに明かにする作業が不可欠である。たしかに、破片をカウントすることは容易ではない。どのように破片を数処理するかは微妙な問題がないわけではない。しかし、そのような消極的な理由を退け、器種構成群を求めることが研究を一步進める方法上での重要な問題であることは自明といつてよい。

これに関連しての、もう一点は、器種の構成だけでなく、同一器種の編年的分類作業である。

通常、同一層や同一遺構内などで一括出土する遺物は、確かに一括投棄されているものならば、それらを一括遺物として扱い、編年上の資料的価値は高い。同様なことは窯跡においても指摘できる。また、消費地においては一括遺物において複数の形式が含まれておればその一括性が疑われ、慎重に扱われる傾向が強い。このことには問題無いようにみえる。

ところが、窯跡においては、同一層序が否かは不明であったとしても、あきらかに同一時期の窯で焼成された土器群に、器形的に見て形式が二時期あるいは三時期にまたがるものが出土する。このような場合、やや具体的に言えば、(一) 窯が長期にわたって使用されたためか、つまり、工人が同一場所で長く仕事に携わり、土器形式の変遷を経た結果となったためか。あるいは、(二) 一時期に二、三の形式の土器が同時的に焼成されたためか、つまり、工人に二もしくは三手があって、それが世代にも対応するような三手であったことが考えられる場合である。勿論、時間的な短期、長期は別にして、出土遺物に一形式しか認定できない窯もあるにはあるが、そうでない上記の例がむしろ多い。

以上のような、複数形式が含まれる窯に関しては当然ながら編年的、時間的な分類を指向しながら器種構成群を開示することが不可欠となることは言うまでもない。なお、問題の提起が実測図の作成の意図から遺物の形式、器種にたいする分類の必要まで説いたが、以下においては、東山古窯跡群の遺物に関する二相を提示し、研究の原点を提示したい。

4、出土遺物の二相

単一相と複次相

東山古窯跡群出土土器の検討は次稿で提示するため、ここでは多くを語ることは出来ない。とはいえ、これまでに荒木実氏によって多くの窯跡の資料が紹介されてきており、そこからいくつかの問題提起が可能と考える。

特に荒木氏は、編年のためだけの資料としての評価を須恵器に位置付けされたことは無く、一古窯跡から出土の資料は実測可能なものは出来るだけ多くを掲載された。

そのような一つの窯跡から出土した多数の資料を一瞥して注目せざるを得ないのは、同一地点であるから同じ窯もしくは併設された窯跡群からの出土遺物であるが、つまり、一地点で採取された土器であるにもかかわらず数形式が見とめられることが少なくない。それも多くの窯でそのような所見が得られるとあってよい。

採集資料の点数が寡少の場合、その傾向を把握することは困難である。しかし、多量の土器が採取、あるいは発掘された場合、上記の傾向は強い。この問題は慎重なそして完璧な発掘調査によって、相当なまで解決できそうであるが、いまこの問いに答え得る良好な既存の報告書は無い。

窯跡にも遺存の状態としては多様なものがあるろうし、遺物の残り具合に関しても多種多様である。発掘調査の成果が、期待する状況を見出すか否か、断言は出来ない。それにもまして、そのことのためだけに「貴重な国民の文化遺産」が発掘、破壊されてはならないとの考えが先行する。

このためここでは、上記の指摘のために二・三の事例を紹介したい。つまり、複次相窯（須恵器の器形の形式が複数次にわたるもの）に東山10号窯や東山18号窯など多くが指摘できる。また、断絶型複次相窯（複数形式認め得るが、その複数形式にも断絶期が認められるもの）には東山27号窯などが指摘し得るとあってよい（註1）。

また、この傾向が今後一層増すであろうことは、これまでに単一遺物相と考えられてきた名古屋市榎ヶ池古窯跡の採集遺物（註2）さえ、この遺物の最初の紹介者である伊藤禎樹氏がその後の検討を経て、複数の時期を想定された。事実、その後の採集遺物には複数の時期を認めることがより正しいことを示唆する遺物が多数含まれていた。もちろん、未調査なので複数の窯があつてしかるべきであるが、問題は同一の一地点で複次相の須恵器が採集し得る事実であろう。

既に触れたように、古窯跡群が、通説によれば、その燃料や陶土を求めて奥へ奥へと窯業地を変えながら移動する。このため、そこには移動の遅速も工人としては選択の余地があり得る。操業期間の大小の目安に土器の形式差が勘案されてしかるべきであろう、との考えも成りたつ。

しかし、この形式差の存在、つまり複数形式の須恵器の存在が窯操業の時間的な幅をより大きくするものであることは事実である。しかし、ここではあえてそのような考えを採らず、仮説としてあえて、同時期と見た。もちろん、この同一時期の意味の中に、単一遺物相に比してより長い時間が見こまれることは否定できないのである。

さて、このように見るならば、複数形式の意味合いが如何なるものかが問われる訳である。そして、ここでは、単一相の場合は同一世代の工人の手になるものと解釈し、複数形式にわたるものは複数の世代の工人が土器製作に関わったのではないかとの仮説に立つ。しかるに二形式あれば親子二代がそれにあたる。三形式であれば、親子に孫を加えての三代である。もちろ

ん、それが祖父、父、子あるいは祖祖父、祖父、父の場合もあろう。しかし、それぞれは同じ意味ではない。どの代で新たに窯を開いたかに関わることであり、それはまた先行する窯の廃絶時期、移動の時期とも関わる。

それだけではない。さらに重要な点は親から子への継承外の実態がどのようなものであったのか、を検証しなければならない。これも先に触れたように、古窯跡群の系譜を追跡し、複数系譜の移動の軌跡を丹念に探求することが欠かせない作業と言える。この延長線上で、焼成された、厳密には失敗した「製品」群がどのようなものであったかを、これまた克明に追跡することが不可欠と考える。

上記の意味合いで、単一相(一手の操業)か複次相(二~三の手によるもの)か、その複次相にしても連続複次相か、断絶型の複次相かそれぞれのあり様によってその歴史的な意味合いが大きく変化する。また、この点を掌握することが窯研究の第一歩であることを強調したい。問題はこのような形で窯跡の出土遺物が観察され、また上記の点を念頭に入れてその後の作業がなされているか否かである。繰り返すならば、古窯跡にはその採集される土器に、単一相と複次相とがあるが、そのことが古窯跡の歴史研究や窯業史研究にどのように生かされているか、といった点である。

5、古窯跡群の展開と遺物相

先に触れたように古窯跡群の研究に不可欠な作業は、窯跡の仔細な分布調査とその出土遺物の実測図の作成である。これだけでは勿論意味合いが薄く、これにそれぞれの「出土土器」の年代を比定していくことである。

そのような作業がどこの窯跡においても実施され、窯跡地帯の実態を把握する上での大きな成果となっている。このことは異存のないことであろう。

しかし、ここでは研究を一步進めるために新たな問題視角と方法とによって新たな見解を提言しなければならないであろう。

たとえば、しばしば提示されるものに、時期別の窯跡分布図、なるものがある。操業年代ごとに、つまり時期ごとに分布図を作成し、窯の段階的な位相を、地域の中で示そうとするものである。

このような場合、単一相窯は一時期だけの記載でよいのだが、複次相窯は二度あるいは三度とそれぞれの地図上に記載される必要がある。もちろん、断絶しながらも複次相を示す窯跡は、地図上に時期を違えて記載されるはずである。また、そうあらねばならないであろう。しかし、実際にはそのような配慮はなされていないのが実態である。

もちろん、このことは窯跡の時期別操業数にも反映されなければならないことは言うまでも無い。つまり、操業期の当初時期だけを操業窯数に加えてもその意味は半減し、歴史的な分析になり得ないといつてよい。

このような窯の系譜、つまり窯跡の軌跡の解明はあわせて、窯業生産そのものとその技術の系譜を伝承、あるいは組織的継承として具体的に追求しなければならないであろう。ここにおいて初めて土器編年の基礎が築かれるとみたい。

ただ、指摘しなければならないことは、ここでいうところの編年とは、ある特定の古窯跡支群の系譜上での生産と技術の系譜的編年であり、谷支群によって、つまり、複数の古窯跡系譜によって複数の「系譜編年」が編まれるべきであると考え。ここにまず必要となるのは、そ

それぞれの工人史をたどり得る工人の生産と技術の編年なのであって、それも微妙に異なる複数の編年となるものである。いわゆる「考古学的編年」の基礎をなすものである。そして、それそのものは複数あることから推し量れるように、「最終的な編年」ではない。

以上のように、最初に求められるべき点は、工人系譜の複数の、しかもある時期から分支し、あるいは断絶する、そしてまた、ある時期に突如、単発的に操業を開始する、といった、いわば地表を這うように山間部に展開する古窯跡群の形と姿である。ここにおいて古窯跡研究の基礎は輪郭を持って遂げられたみたい。

6、三相遺跡の仮説作業

最後に問題となるのは、採集土器相に複次相、わけても三相がしばしば、かつ顕著に認められることである。

先にも触れたようにこの三相には、親子と祖父の三代を当てる仮説をたてた。でなければ、同一世代の三名の工人がそれぞれ異なる形式の土器を制作したこととなる。これが考え難ければ、親子祖父の三代がそれぞれ新旧の土器形式を制作したとみたい。

仮に、成人（父親）たる工人が、新たな土地において開窯したと仮定してみたい。彼が他から移動してきたとすれば、そこにはこの成人の親・祖父・老人がその仕事を助け、またこの成人の子が同じく土器制作に励んだと仮定し得る。この場合、老人の手になる土器は古い形式を踏襲したものである。このように考えてよれば、三形式の土器が同一地点で出土する理由が理解できる。

また、この場合には成人・父親が制作した土器が最も多量となるであろうが、祖父・老人の制作数が成人よりはるかに多量であるならば、この開窯は父親・成人の手になるものではなく、祖父・老人が今だ健全な時期に、子、孫を引き連れて移動してきたとの見方がたつ。そして祖父・老人が健全であった時期が長ければ、彼の孫は若年であったし、またこの祖父・老人の母親もしくは父親が老弱であるとはいえ、制作にすこしばかり関わっていた時期があったかもしれない。そのような状況も出土土器の形式差と土器量によって一定の推察が可能となるに違いない。

また、単一相の土器の場合は、一時期だけ父親だけで窯を操業した場合、複次・二相では、親子二代で移動したとの考えもなりたつ。孫誕生以前か、祖父が没して後か、である。しかし、これらの想定以外の生産体制が予測されないわけではない。たとえば、製品の品質管理を目的に、形式差を著しく抑え、親子三代がほぼ一形式を保持したような場合である。複数の古窯跡群の系譜のなかには、ありえる工人集団とみたいが、いまのところ東山では考え難い。その意味でもあらゆる可能性を探りながらこれまで述べてきた仮説を検証していく必要があると考える。

むすびにかえて - 土器編年の問題点 -

個々の系譜をもつ古窯跡群は、それぞれが工人家族史を持ち、あわせて「制作レベルでの土器編年」を結果的に作り上げたといつてよい。つまり、ここでは複数の制作レベルでの編年が完遂し得るのである。ではそれら複数の編年はどれが正しいのかといえ、どれもが工人史を語るものであって、誤ったものではない（ただ、製品が窯に残らない場合があり、生産側から

する編年であるとしても完全なものではない。この点は別に後編で論じる。

例えば、ある工人集団がある種の器種を制作しなかった場合。そうならば彼らの編年からはある器種が脱落することになる。しかし、それは彼ら工人の真の制作史を知る上で重要な事実なのである。ここに「制作レベルでの編年」なるものがはじめて誕生することになる。しかもそれは、「多様な工人集団の制作レベル編年」として成立することになる。

同じ論理で言えば、消費地では消費集団のレベルごとの編年も成立し得る訳である。また階層的な編年が可能ならば、生業種レベルでの編年などもあり得るであろう。しかるに、もし編年なるものが万能であらねばならないのならば、それは特定の窯跡出土遺物だけから「考古学的編年」を求めることは無意味となる。窯跡からの編年は先に述べた系譜ごとでの、それぞれの、特定の工人の窯業が分かる編年のみが有効な意味合いを持つのである。

しかるに、これを敷衍すれば、あれこれの窯からの寄せ集めた土器編年なるものは多くの意味あいが増えるにすぎない、との見方に立つこととなる。しかし、では、一古窯跡だけからではなく、窯跡からも生活跡からも墓地からもすべての遺跡からの寄せ集めの土器群の編年こそ、考古学的編年の目標に近いとしても、その作業は複雑さを増すだけであるとの誇りを免れることは出来ないであろう。

将来の課題として、ここで指摘し得ることは、一古窯跡群から任意に取り出した土器からする編年は先の、まず工人の歴史を、そして窯業史の原点を見出していくといった方法上からも、克服すべき最初の基本的な課題である。

回避すべき点はこれだけではない。上記とも連動しているが、編年作業における「窯式」設定の問題がある。

「窯式」は先に触れたように、もしこの作業が意味を持ちかつ、可能な作業ならば、古窯跡系譜が、厳密に、技術と製品品質を保持することに注意を払いながら、窯を移動させたものであって、いわば「単一相系譜古窯跡群」が抽出できる場合に限って押し当てる事が出来よう。しかし、そのようなものがなければ、「窯式」なるものは、多くの説明を要するだけである。つまり、どの土器を持ってこの「窯式」とするのかの説明がなければならぬし、ならば多様な形式の混在する窯を持って、一窯式を設定することは無理がある。

再度、編年の問題に立ちかえるならば、生活跡・集落跡などにおいても、考古学的編年がすべて満たし得るような遺物の使用があったかどうか、疑問である。集団によってはある特定の編年上の土器群を全く用いることなく、生活と時間を経過していた事実もあったに違いない。

例えば、ある集落が、ある形式の土器をたまたま用いることがなかったとすれば、編年に照らしての研究上では、その時期を欠いた遺跡・ムラの断絶期、として評価されるであろう。そして彼ら集団はその時期、他の地点へ移動し、再び舞い戻ってきたとみなされる。なれば、その編年なるものは、ある集団には適用不適な代物であることになる。

しかれば、それぞれの集団は、それぞれその系譜にしたがって、たとえば「単一の系譜をもつ竪穴住居跡群、つまり特定の人々」による固有の編年が存在することになる(もちろん、たまたま土器が持ち去られてしまい現地に存在しなかった場合もある)。

このように編年を考えるならば、考古学的編年以外に、それぞれの系譜墓群にも、あるいは竪穴住居群にも、あるいは塩生産地や古窯跡群にもそれぞれの系譜史がたどれる編年が不可欠であるし、存在し得ることになる。

そのなかで古窯跡群の土器編年が重要なのは、生産跡であり、同時的な廃棄物からなる遺物であることにある。とはいえ、先に触れてきたように、土器形式が単一な場合での操作と、複

次でのその後の作業や位置づけは大きく異なるのである。ましてや、古窯跡は窯業史や技術史、ひいては工人史、家族史のまず研究材料であって、それ意外ではないことを前提にしたい。そうした研究の結果として、須恵器編年が考古学的編年に大いに裨益あることは否めない事実であると考える。

註

- 1、荒木 実『東山古窯址群』 1994 中日出版本社
- 2、名古屋女子大学歴史学研究会編『東山古窯跡群と岩崎直也 記録編』、2004

〔付記〕

今年(2005年)の8月27日、荒木先生が俄かに他界された。実は、今年はこの東山古窯跡の研究が緒に着く記念すべき年となるはずであった。8月、早々から旧集成館の200箱をこえる遺物を、猛暑の中で館へ運び込み、いよいよ先生から種種ご教示を仰ぐ矢先であった。このことを思うと実に残念である。

また、昨年は、いつも温かく接待して下さる奥様、貞子様が亡くなられたばかりであるのに・・・。実に重ね重ね残念というほかない。

6月に、「ミニミニシンポ東山古窯跡群と岩崎直也展」を集成館で実施し、そこで東山のお話をした時、先生から「それは面白いわな、それならいくらでも研究できるわな」と励ましのお言葉をいただいた。先生はもう東山からこれ以上の研究は不可能と本心から思っておられたわけではないだろうが・・・。

小稿はそのシンポの折の報告を書き改めたものである。今後より体系化したものにしていきたい。今はただただ、お二人のご冥福をお祈りするのみである。